

べ平連の経験と

共同行動の論理

開高健問題から反改憲運動まで

吉川勇一〔聞き手・天野恵一／水島たかし〕

● 人間関係としての運動

天野恵一…今日は、べ平連をめぐる問題と共同行動の原則について、そしてそれらを踏まえて、現在の「改憲」に反対する運動についてのお話を伺いたいと思います。

まずべ平連についてなのですが、今回こだわりたいのは、べ平連における開高健さんの問題です。開高さんのことをお伺いしようと僕と水島くんが思い立ったのは、この間、栗原幸夫さんや武藤一羊さん、福富節男さん、もちろん吉川さんなどからべ平連についてのいろいろな話を聞いて、

その関係で僕も水島くんもべ平連について体験的にはまったく知らないし、そんなにきちんと調べたことがあつたわけでもないで、いろいろ読み出したわけです。そうすると、「ニューヨーク・タイムズ」の意見広告のときに開高さんがすごく中心的に頑張ったという話があるわけですね。

吉川勇一…あの時の彼の活動はすごかったですよ。

天野…しかし、彼は後に運動から消えてしまい、べ平連の歴史からも見えにくくなっていると思います。イントレピッドの四人の映画（六七年一月）にも、開高さんは鶴見俊輔さんの隣にちゃんと座っているんですね。

吉川…そうです、しゃべってます。

天野…サルトルの来たとき（六六年一〇月）もジョーン・バエズのと看（六七年一月）もたしかいますよね。そういうふうには彼が存在した記憶があまりちゃんと語られていないのではないか。彼がベ平連の運動から距離をとってしまつたことにある問題というのは何なのか、もうちよつとちゃんと整理された方がいいのではないかと思ひまして。そのことでもまず吉川さんに聞いてみようと思つたわけですよ。吉川…最初に前提的な話が必要だと思ひます。運動から離れるという場合、会員制度ならば、入つたのか去つたのかは非常にはつきりしている。あるいはいつからいなくなつたのかとか。ところがベ平連はそうじゃないですよ。そうすると、いつの間にかあんまり顔を見せなくなつたという人が、当然いるわけですよ。それを抜けたあるいは去つたとしていいのか。たとえば今の「市民の意見30の会」の事務局だつて、「私はもうやめます」と宣言してやめた人についてはハッキリして。だけどそうじゃなく、だんだん来る頻度が少なくなつて「そう言えば、あの人はここ二、三年来なくなつちやつたね」という人が何人もいるわけよね。だけどそのうち「ご無沙汰しました」ってひよいと来れば、「ああ良かった、あなた来てくれたか、じゃあまたよろしく」というので復活するでしょ。そういう関係とていうのがいろいろな側面であるわけですよ。つまり、去つ

たり抜けたりしたのか、一時お休みしているのか、気分が變つたのか。その辺が非常に曖昧とした性格の運動体とていうのもあるわけですよ。市民運動といつてもかなりその辺にはいろいろな差があつてね。ベ平連といつてのは一番その辺がハッキリしないグループだつたと思う。しかしそれだから保つていたという側面があつた。そこが、ベ平連に参加してなかつた人、あるいは後から来た人やそれ以前の人にはなかなかわかりにくいと思ひますよ。当時新聞記者に「会員は何人になりましたか」と聞かれて、「会員制度じゃないから何人かわからない」と答えても納得してもらえなかつたんです。その上、「某さんはその後どうなつたか」といふ返りになると、明確に判断することはかなり難しい。

この点是小熊英二さんとも評価の違いがあつて、何度か意見のやりとりをしたことがありました。

たとえば、桑原武夫さんは「ニューヨーク・タイムズ」の意見広告と、その後の「ワシントン・ポスト」の時には呼びかけ人になつていたし、それから広告が出た後で経過報告を賛同者に全部送つただけで、それも桑原武夫さんの名前で出しているんですよ。だからそういう運動の際の内輪の、呼びかけ人会みみたいな五、六人の会合のときには参加したこともあるし、僕たちが京都に行けば、食事などにもよく連れていつてもありました。そういう場が初期

にはあった。だけど、やがてそういうこともだんだんなくなっていったことも確かだ。

しかし、ベ平連が一九六八年の京都でやった「反戦と変革にかんする国際会議」というのがある。これは京都の国際文化会館を借りただけでも、最初は京都市が首を縦にふらなかつたんだよね。「過激派じゃないか」「全学連も来るのか」ということで。そこを桑原武夫さんの多田道太郎さんが間に立って、京都市長に「これは大丈夫、私が保証するよ」と言ってくれて、それで借りられることになった。つまり、会合に出てくることはなくなっても、そういう肝心なときには、桑原さんはベ平連のために大変力をつくしてくれたのでした。だから、あまり簡単に桑原さんたちはその後ベ平連から遠ざかつたと断ずることは出来ない。

でも、六八年のその京都での会議には、中核派の北小路敏さんや全学連の秋山委員長なんかも出てきて、最後はインターナショナルを歌って終る。小田さん自身も「ベ平連」・回顧録でない回顧（第三書館）の中で「私にも何かしら『革命的』気分酔っていたところがあったかも知れない」（三四〇頁）と書いていますが、その会議はそういう性格を帯びたものになった。小熊さんは、そのために、これを機にして桑原、松田道雄、多田道太郎といった京都文化人グループが一斉にベ平連から手を引いたのではない

か、と言うわけです。現に松田さんは、「展望」に全学連に対する叱責めいた文章も書いています。そういうのが小熊さんの説なんです。その後一体それらの人とベ平連との関係はどうなったのか、去っていったことについてベ平連側にハッキリした批判めいたものはあったのか。松田さんのそれはベ平連批判にもなってるんだけど、そういう全学連的な傾向を許容していたベ平連は軍隊になるのかというのが松田さんの批判でしたよね。軍隊になっちゃいけないだと。松田さんらはそういうことを言って、ベ平連から手を引いていったんじゃないか、という見方です。

ですが、それは非常に難しいところなんです。果たしてそれらの人は去つたのか。そして、それ以前ならば去つていないでメンバーだったのか。そこはものすごく曖昧ですね。僕は小熊さんとのそのやりとりがあつたもんだから、鶴見俊輔さんにも念押しし電話をかけてそのところの評価を聞いたんです。彼は即座に「そんなことありません」と否定し、「桑原さんも松田道雄さんも、もう死ぬまでベ平連でした」と鶴見さんは言うんですよ。そのとき鶴見さんが具体例として力説したのは、梅毒にかかった脱走兵がいてジャテックの若者たちを巻き込んで大変だったことがあつただけで、そのときの薬を松田さんがえらく苦労して手配してくれたというエピソードなんです。だけどそれは、一体ベ平連としての活動に入るのか。松田さんは、困

っている鶴見さんに力を貸すことを個人的にやっただけなので、そんなものはベ平連ともベトナム反戦とも関係ないんだというふうに切つて捨てられるのか。それとも、松田さんは深いところでベ平連の大きな流れを支持・賛同しているからそんなこともやってくれるんで、それはベ平連の活動と言つていいのか。後者が鶴見さんの意見ですが。

その辺は非常に微妙なところで、基準がハッキリしないだけにわかつてもらいづらいところなんですよ。

天野…運動というのは大概の場合そういうふうにししか成立していかない部分があるから、その文脈は僕の体験からもそれなりに分かりますけどね。ただ逆に困っているのは、栗原幸夫さんに開高さんの件でお伺いしたときは、栗原さん自身も開高さんがあんまりアクティブじゃなくなつた後も付き合いがあつたし、小田実と開高はずつと親しかつたんだよとおっしゃるわけです。人間的な親しさはその後もずつと変わつてないという話なんです。

吉川…それはその通りですね。

天野…その点はもちろんウソではないと思います。栗原さんはAALAの関係なんかもありますから。ただ、そこはそれで終わっちゃうんですけど、それはやっぱり単純に処理しすぎではないか。小熊さんが何にこだわっているのか僕はよくわかりませんが、ただ対立とか分岐点がどこかに、思想の問題も含めてあるのではないかと。

吉川…小熊さんの場合はね、自分なりの筋書きがあるわけです。六七、八年までは、戦後民主主義派の文化人が取り仕切つて六〇年安保のつながりでベ平連は展開しているのだが、六七年の後半から六八年にかけて、つまり羽田闘争以後ね、局面がガツと転換するんだと。ベ平連はそこに乗る。それで反戦青年委員会や全共闘と組んで機動隊とドンパチするあたりに入つていくのだと。そこでもつて世代交代というか、中心部分の交替が行なわれたというのが彼の理解なんでしょう。

天野…理解というか仮説ですね。

吉川…仮説ですよ。だけど、その仮説を立てるとき、ベ平連はそうじゃないとなると筋書きからいつて困るわけですよね（笑）。それでなかなか納得しない。「でもね、吉川さん。そうは言うけど、やっぱりそこは違うんじゃないですかね」みたいに。

●ベ平連と開高健

吉川…ただ開高さんの場合には割とそこはハッキリしているんですよ。というのは、さつき天野さんが言われたとおり、「ニューヨーク・タイムズ」への意見広告運動の時の開高さんは、それはすさまじい動き方だったですよ。

天野…他の方が書いているのを見ても、ものすごい頑張っ

たというのがいくつもありますね。

吉川…もう他の原稿書きを一切ストップして、書いたものは『週刊朝日』だの『朝日ジャーナル』だのに、とにかく『ニューヨーク・タイムズ』へという一本槍。それで初代ベ平連事務局長の久保圭之介さんと二人で金集めに全国を駆け回った。原水禁の大会に行つて挨拶させろと申し入れ、原水禁大会で開高さんは壇上からカンパの訴えをやった。天野…およそそういう演説とは遠いタイプの人だと思ふんですけどね。

吉川…そのことも開高さんは原稿にしたんだが、そこで「原水キンだったか、原水キヨウだったか、とにかく原爆反対といつてたくさんの方が集まるところへでかけて趣旨を説明し…」と書いた（東京からの忠告——わが「ベ平連」アピールに力を）。これに対して原水禁の怒ること怒ること（笑）。わざわざ頼み込んできたから演説させて金も集めさせてやったのにな、キンだかキヨウだか知らないが「みたいな文章はないだろうと。原水禁と原水協はものすごい対立の最中だからね。「だから文化人は嫌いだよ」「あれは吉川さんひどいよ」という話を直後に原水禁の人から聞いたですよ。だけど、開高さんにしてみればまさにキンもキヨウもない、とにかく金が集まるころならもうどこへでもという調子で、馬車馬みたいですね、ホントに。とにかくありとあらゆる機会をみつけては全国を

飛び回った。その相手をしたのは久保圭之介・初代事務局長なんですよ。

最初のベ平連事務局というのは思想の科学の關係で銀座にあつて、それから久保圭之介さんの事務所へすぐ移るんです。久保さんの事務所というのは映画制作の事務所ですけど、赤坂の一ツ木通りかな、にぎやかな通りからちよつと入ったところにあつただけど、かなり広い空き地のなかにポツンと平屋の一軒家が立つていて、まさに事務所だかなんですけどね。飲み屋の女将の持ち物で、それを久保さんのために提供していて久保さんが事務所に使つた。一部屋にちよつと台所がついていてるような、まさに事務所しか使えないような部屋でした。もしかするとベツドもあつて久保さんがそこで寝泊りしていたかもしれない。それをまるつきりベ平連が占拠しちゃった。武藤一羊さんだの古山洋三さんだのいいだもさんらに連れられて、僕も二、三回はそこに行つたよ。真真中にテーブルがあつて、周りに椅子があつて、そこに集まつてベ平連の議論ばかりやる。

だから久保さんの事務所を完全にベ平連が占拠しちゃつたわけね。久保さん自身も映画の仕事を放り投げて開高さんと一緒にそんなことばかりやっていました。それで『ニューヨーク・タイムズ』の広告が出て、二人とも本당にご苦労さんでしたということになるんだけど、久保

さんはずっと仕事してないから飯の食い上げになっちゃったんだよね。久保さんが持ってた中古のキャデラックの自動車もベ平連デモの先導車に使ってエンジンを焼き切れちゃうし、久保さんはさんざんでしたね。その頃からベ平連には「内閣」という呼び方がもうできてたかな。デモのときに毎回車を運転する松本市寿さんが「運輸大臣」だと（笑）。他にも「宣伝大臣」とか、「大臣」がいたんですよ。その頃から小田さんはもう「天皇」か「総理大臣」とかという話になってたんだよね。僕は武藤さんなんかにひっぱられておとなしく座っていて、ほとんど討論にも入らない傍聴者みたいな感じだった。久保さんは飯の食い上げになって、映画を作らざるを得なくなる。確か、吉田喜重監督の「女のみづうみ」という映画だったと思うんだけど、そのプロデューサーを引き受けてその仕事が六五年の暮れから始まるので、事務局長をやめさせてくれという話になった。誰か後釜がいらないかということになったとき、武藤さんが、俺の友達で女房に食わせてもらって失業してる奴がいるからと、僕を推薦したんですよ。

話を戻すと、実に意見広告の開高さんの働きはすごかったわけね。それ以後も、さつき天野さんが言ったように、節々のところで小田さんが声をかけたり鶴見さんが声をかければ、いいよと出てきて、挨拶をしてみたり討論に加わったりということはある。しかし、その頻度はだんだん少

なくなっていく。意見広告以後も「ニューヨーク・タイムズ」のいきさつを書いたり、ベ平連でも開高さんに随分講演を頼みましたけどね。だけど、その講演の中身は、他のベ平連、たとえば小田・鶴見・いいだ・武藤・栗原といった人たちのとはだいぶニュアンスが違うんですよ。既に初期からね。ベトナムの諺や昔話を引きながら、民衆のしただかさや民衆の知恵などについてはよく論じましたが、同時に、はたして武力によってベトナムは解放されるのか、仮に南の解放戦線が勝って米軍が負けたとしてもそれまでにどれだけ民衆の犠牲が出るのか、そういうことによってもたらされる平和とは今みんなが思っているような平和ではないのか、そういう疑念を彼は最初からしゃべっていました。そのうちに、だんだんもう南がいいのか北がいいのかわからなくなってきた、戦争というのはそんなもんだ、それがわからない奴は行って死にそうになってみるみたいな話を言うようになってきて、そういうのと重なって次第にベ平連の運動から遠ざかっていくという感じがありましたね。だからたとえばサルトルが来たからその集会に来てよといえ、それは引き受けるけれども、「ニューヨーク・タイムズ」のときのように先頭でバリバリ、「ベ平連の開高です」というふうにして飛び回るといことはもうなくなっていくたわけです。その限りでは、開高さんはもうベ平連から引いたというふうには思った人は少な

かったでしょうね。その点では、桑原さんや松田さん、多田道太郎さんとは明らかに違うと思うんだな、開高さんの場合は。

天野…違いますね。そこはちょっとこだわった方がいいと思うんですよ。

吉川…城山三郎さんの場合とも違いますよ。城山さんも初期においては茅ヶ崎の彼の住んでいたところでベトナム反戦茅ヶ崎の会というのを作って、僕と小田さんが講演に呼ばれて行ったり、それからジョン・バエズのときは一緒に歌を歌ったりしていた。だけど開高さんのような離れ方をしたとは誰も思わないわけだね。城山さんだって、もっぱら企業小説を書くようになったり、大臣の小説を書いてみたりして、あまり運動の前面には出て来なくなってますよね。茅ヶ崎の会でも引いてる。それでもやっぱり開高さんほど特徴的ではない。開高さんの場合、特に、後は「オーバー」とウイスキーの話だけになるでしょ。ベトナム反戦だけじゃなく、社会問題についての発言もしなくなる、誰が見てもそういう転換をしたと思ったでしょう。そこはちょっと桑原さんと分けて考えられるんじゃないかなと思います。ただ、個人的な関係、あるいは感情的に悪くなったということは全然ないわけね。ベ平連の中で「開高は裏切ったか」とか「脱落した」という評価は全く出なかった。これも別に抑えたわけじゃないし、そんなことを

言うべきじゃないと小田さんなり誰かが言った訳じゃないのですし、それは自制されていたと思うんですよ。

水島たかし…そうした評価は本当に全然なかったんですか。吉川…気分としてはあつたでしょうね。たとえば、六七年のイントレピッドからの脱走兵の記録映画で四人の日本人が登場するでしょ、日高六郎・鶴見俊輔・開高・小田。この四人が映画でそれぞれ感想をしゃべるわけですが、あとの三人と開高さんのしゃべっているのはちょっとニュアンス違いますよ。開高さんは「昔から日本の言い伝えに、獵師も懐に入れば窮鳥これを撃たずという諺がある。今私たちのもとに飛び込んできたこの四匹のか弱い小鳥を私たちは……」云々という、そういうニュアンスで彼は四人を助けるべきだという話をするんですね。それを聞いて「ちょっと違うんじゃないの」という感想を持った人は少なくともいると思います。つまり、かれらは「窮鳥」じゃないでしょう、むしろベトナム反戦の先頭に立って闘っているんで、日本の方はその戦争に責任があるのに、日本は獵師だ、かれらがか弱い鳥だ、という喩えは違うよという意見はだいぶあつたと思う。だからその辺で、ベ平連当時の参加者、特に若者ですけど、開高発言は既に違和感を持って受け止められていたように思いますね。六七年の暮れですからね。水島…事実関係から確認すると、六五年後半というのが一番開高さんが動いていた時期ですよ。

吉川…六五年いっぱい、そして六六年までは続くわけね。
水島…その頃にはまだ吉川さんは事務局長ではないわけですよね。

吉川…私が引き受けるのは六五年の末ですから。

水島…そうすると、六五年段階では吉川さんは開高さんとあまり接触はなかったわけですか。

吉川…そうですね。でも外から見ていても「開高さんの働きはすごいな」というのはよく見える。とても強い印象がありますよ。

水島…それで吉川さんが事務局長になってからは開高さんはあまり会議には来ないで……。

吉川…いえ、僕は何度も打ち合わせで会いました。「ニューヨーク・タイムズ」の後の「ワシントン・ポスト」の意見広告も開高さんは参加はしてたわけだね。

天野…意見広告って何回でしたっけ。

吉川…アメリカの新聞は二回です。その後雑誌などがありますが。

天野…その二回はフルに開高さんはコミットしているわけですね。

吉川…そうですね。だからその後も打ち合わせに、上井草だかの開高さんの家まで、僕も西武線利用者でしたから、よく行きましたよ。奥さんとしゃべったり娘をあやしたり。そんなこともしたんです。だから僕が事務局を引き受けた

後もしばらくは、開高さんと個人的なコミュニケーションはありましたよ。ただ頻度がだんだん少なくなってゆくといいことはありましたね。

天野…六六年くらいからですか。

吉川…いや、もうちょっと後ですね。六七年以降ですね。六六年までは続いていたと思う。

水島…最後に関わったというのはどの辺りですか。

吉川…わかりません。何をもって最後というかだよな。

水島…本当に出てこなくなるとか。

吉川…そういうイベントが周期的にあるわけじゃないからさ。どういふところが最後かというような明確な「けじめ」をつけるというのは違うなあというのが僕の感じなのよ。そこまではいたんだ、そこからはいなくなっただ、ここが切れ目だというのは決められないというのが僕が先ほどした話です。最後はいつですかと聞かれたら「全くわかりません」と言うよりしょうがない。

●「北」の暴力と非暴力主義との矛盾

天野…開高さんの「輝ける闇」などのベトナム戦争に関する小説がありますね。

吉川…ベトナムに関しては、開高さんはあれでそれこそ「けじめ」をつけたという感じがするんですけどね、僕は。

あの後は全部「オーバー」になっちゃうわけですから。

天野…おそらく長編としては七二年の『夏の闇』あたりが最後ですね。それはともかく、そうした小説の中では、ベトナムのコミニズム、「北」の国家・軍隊と連携している「解放戦線」へのシンパシーが始めからないんですね。首尾一貫して、ないんです。正しくも「解放」後が大変なことになると思ってるんです。開高さんの小説を読んできて特徴的なのは、アメリカの侵略には当然批判的なわけですけど、動員されてこんな地獄の戦場にいるアメリカ兵にも同情的なんですね。彼は一緒に動いているわけですから吉川…そう。一緒に死にそうになつたりしているわけだからね。

天野…それと同時に、たとえば仏教徒などの南の独裁権力と闘っている人々、「反共」のベトナムの中の人たちへのシンパシーはある。ですから、「窮鳥懐」論というの、僕なんかはその文脈で言うところのわかる気があるんですよ。

吉川…彼としては当然なのかもしれませんね。

天野…『ベトナム戦記』からの流れでいうと、彼のスタンスというのは基本的にそういうものだったんじゃないかと思えますがね。

吉川…だけどそれが六七年の最後あたりになってくると、ベ平連の参加者にとつては違和感を持って受け止められる。そういう立場の違いが出てきていると思えますね。

天野…そのズレについて逆から言うと、今から考えれば、開高さんのスタンスというのは本当は意味があったと言えんじゃないでしょうか。

吉川…あつたと思います。その頃はそれを受け入れて議論のテーマに据えるという空気はなかったと思いますからしようがないとはいえ、もうちょつとそういう見方を注目して、全体で議論していれば、その後の展開は少し違つたかもしれないと思いますよ。

天野…違いますね。ベ平連の運動だけじゃないですけど、あの時代の運動全体が持った思想的質の評価の中では、その点は結構大きな問題を残していると僕は思います。

吉川…今となつてはそういう問題点があつたことは認められますが、当時の運動の空気は解放戦線万歳でしたからね。解放戦線がやったテロ行為があつたことも事実なただけ、しかし当時それは取り上げられなかった。それをどう評価するかなんていう議論がもつとあつたら、運動の深みは増したはずだと思えますね。

天野…そうですね。今僕らが遭遇している問題はもう既にそこにあつたんですよ。

吉川…そうなんです。その後コンボやイラクで起こつたことが既に当時あるわけですよ。

天野…その問題はだから、開高さんの方には見えていたけれども、吉川さんだけではないですが、いわゆる新左翼文

化、第三世界主義的な気分の流れていく運動の中では特に見えなかつたし、見ないようにすることによって成立したようなもんですね。

吉川…そうだと思います。

天野…その問題は今からでもちゃんと考え直さなきゃいけないことなんじゃないですかね。

吉川…海老坂武さんは、もう一〇年以上前に「市民の意見30の会・東京」主催の講演会の中で非暴力について語っていて、「ベトナム解放」の道についてあの道しかなかつたのかと問うています（「見えない脱走兵」と新しい市民像」、「市民の意見30の会・東京ニュース」No.17（一九九三年七月三一日号））。そうじゃない非暴力の解放の道は、時間はかかつたにせよ、なかつたのか、また、あれほどのベトナム人民の犠牲者を出す以外の道もあつたのではないか、と考えていると話しています。したがって解放戦線のやつた武力闘争というのに、彼は全面的支持ではなくなつたというんですね。しかし当時の海老坂さんはそんな立場じゃなかつたからな。

天野…当時のファノンの紹介者としての海老坂さんは違いますよね。

吉川…あの東大全共闘闘争を支持する共同声明は海老坂さんが書いているわけだし（「かくも激しき希望の歳月」岩波書店）、その時代の気分にはトップリで、解放戦線万歳だつ

たはずです。その海老坂さんにしてからが、その後はさつきみたいなことを言うようになる。そのような再考慮というの、僕はかなり運動としては大事なことかなと思うんですね。

天野…僕はベ平連の中の開高健問題というのは、結局そういう普遍性がある問題じゃないかなと思つたわけです。それからもう一つ、吉川さんと僕の長いやりとりをふまえて言うと、ベ平連の非暴力直接行動というイメージ、非暴力思想としての魅力というものを、あの時代に僕は学生でいて全然感じなかつた。それはやつぱり、ベトナム戦争の片一方の当事者に荷担するスタンスが問題だつたのではないかと思ひます。そうしたスタンスから出てくる非暴力直接行動という理念は、やつぱりちよつと自己矛盾している要素があつたんじゃないですかね。

吉川…自分は非暴力だというのに向うではまさに暴力をつかつているのを全面支持しているのは、原理的に矛盾しているんじゃないかというね。

天野…矛盾はありますよね。当時は論理的にはよく整理できなかつたけれども、やつぱり解放戦線への心情的荷担が強かつたでしょうから、それはやつぱりおかしかつたんじゃないかな。

吉川…それは無理もない指摘だと思いますよ。矛盾しているじゃないかという指摘はね。批判として成り立つと思ひ

ます。ただベ平連の中では非暴力についても、いろいろなスタンスが混在していたわけですね。戦術的非暴力、とりあえずの非暴力、暴力よりはまだいいや程度の非暴力、あるいは原理的な絶対非暴力とかね。それがゴチャゴチャになつていた。割と純粹だったのは鶴見俊輔さんだけど、その鶴見さんにしてからが、南ベトナム解放戦線の暴力については一言も言っていないわけですね。

天野・鶴見さんたちこそがむしろちゃんと言うべきだったのではないか。小田さんもそうだけど、原理的には非暴力主義を立てていた割には、ベトナム戦争の具体性の中ではそれが生きていないんですね。

吉川…というか触れてない。だからその点は一度鶴見さんに聞いてみたいと思うけれど、つまり、触れなかったのは、今触れたって受け入れられないだろう、まあ触れない方がいいか、ということだったのか、彼自身がそこは目をつぶっちゃつていたことなのか。よくわからないことですけど。あと開高さんとの関係では、高島通敏さんが久野収さんにインタビューしたものが「エコノミスト」に連載されて、後に「久野収 市民として哲学者として」（毎日新聞社）というタイトルで本になりますよね。これは非常に問題がある本だと僕は思っているんです。問題があるというののは、

久野さんの論が間違っているというようなことじゃなくて、聞いている高島さんや出版元の毎日新聞の編集者の手抜き

についてです。あのインタビューでは、久野さんの思い込みや思い違いが多く入っているんですよ。記憶が曖昧になつてきていて、事実関係の誤りがかなりあるわけね。たとえば、新宿ベ平連の古屋能子さんが「横浜ベ平連の古屋能子」（二九二頁）とか、「小中君のような映画プロデューサー出身がいた」（二九四頁）などという単純なミスもかなりある。それが「エコノミスト」にも出てくるし、書籍になつても直つてないんですよ。こんなのは、編集者が少しでもベ平連のことを知っているか、調べてみれば、当然気づくはずでしょう。だから、ベ平連や古屋能子、小中陽太郎を全く知らない人が編集したに違いないのよ。だけど、聞き手の高島さんはそうじゃないのに、どうして「横浜ベ平連の古屋能子」が訂正されていないのかね。

天野・チェックできてない。

吉川…ほとんどチェックしてない。「一九六五年にフランス全土を揺るがす大学闘争が起こる」（四四頁）という記述も一九六八年のことじゃないでしょうか。もっと大事な点では、「それまでの両君「小田実、開高健」は、六〇年安保には参加したが」（二六四頁）とあるけど、小田さんは、フルブライトから帰国した直後で、在日はしていませんが、いわゆる「六〇年安保闘争」には参加していません。たはずです。そういうのがほかにもかなりある。その中の一つに、開高さん問題があるんですよ。開高さんがベ平連

からだんだん遠のいてゆく問題についてのエピソードを久野さんがするんですよ。

「それで彼「開高」は、小田君とじっくり話し合い、結局、開高君は身を引くという形式になった。ただし、この二人が相互に守る約束、すなわち、開高君とベ平連は絶対に非難し合わない、ベ平連はベトナム戦争反対の市民運動を続けていくから、開高君は黙して立ち去るという条件だった。こうして、「脱退」につきものの、相互非難の泥仕合は回避されました。ベ平連的市民運動の「新しさ」というか、特色は、こういうところにもはっきり出ていたと思うんです」(二八〇頁)。

この話は僕には初耳でした。それで機会をみて小田さんに、「こういう話を読んだのだけど、そんな話し合いはいつどこであったのよ」と聞いてみた。そうしたら小田さんは、「そんなこと俺も初めて聞いた。そんな話し合いはやってない。全然事実じゃない。それは久野さんの希望が事実になりかわったんだろう」と。つまり、そんなことではなかったか、とか、そんなことがあったとしたらいいなあと久野さんが思ったことが、思っているうちに時間の経過とともに久野さんの頭のなかで事実になっちゃったということではないか、と小田さんは言うんですね。私も「まあそんなことだろうね。あなたが全然知らないというのならなかったんでしょ」と言ったんだけど、でも困ること

は、権威ある毎日新聞社から出された単行本のなかにそう書いてあれば、それは歴史的事実になっちゃうんですよ。後の人は当然引用しますよ。

水島・事実関係としても、開高さんがベ平連について「黙して立ち去」ただけとは言えないんじゃないでしょうか。明確な「非難」ではないにせよ、何の言及もないわけではないですよ。以前栗原さんに聞いたときには、ベ平連を離れたことについて書いた文章は特にないという話だったのですが、「耳の物語」という自伝的小説では、自分が講演で「北」の暴力を批判してもみんな聞いてくれないのでひきこもったという話があります。

吉川・それはさつき言ったとおり事実だからね。そういうことを講演で彼は言ってますよ。だけどそこではおそらく手は叩かれなかっただろうし、場合によっては「開高さん違うよ」という野次くらい、あの時代ですからあったとしても不思議じゃない。

水島・一九七二年の「人間として」の最終号(12号)にも「ベ平連」の内部で話しているも合わなくなった。つまりアメリカがぬけさえすればいい、こういう考えですね。アメリカに反対するわけだ。アメリカがぬけたあとでもベトナム人民同士が殺し合いをするということが発生するんだとほくは思うが、そのベトナム戦争にも反対するのとかほくは聞いたわけだ。その場合、どういう理由でそれに反対

するのかということを開いたんだけれど、だれ一人として答えようとしなさい」(「毒へびは急がない」二八四頁)と書いてあります。「非難」ではないのかもしれないませんが、ちゃんと本人は書いていますね。

吉川…それは意外じゃないですよ。

水島…この文章は当時吉川さんは読まれていたんですか。

吉川…ええ。「人間として」はずっと読んでいましたから。

水島…こういう考え方に対してどう思われましたか。

吉川…七二年になっていてるんですから、「その考え方は間違っている」とはもう思わなかったでしょうね。今ちゃんとした記憶はないけど、当然これは読んでいて、その時自分が開高さんに違和感を持ったという記憶もないから。おそらく、「それはそうだろうな」というふうな受け止めたと思いますよ。七二年になってくると、社会主義国のダメさ加減についてほとんどみんなの共通の理解になってますしね。既にその頃になると南ベトナム解放戦線から分離して、パリに亡命した活動家の手記なんかいくつも出てくるでしょ。自分は南ベトナム解放戦線の主要メンバーだったが裏切られたとかね。あまりデッチ上げとは思えないよ。うな自伝とかが既に七二年には出だしていると思えますし、そういうのをもちろん僕は読みましたからね。解放戦線の実態の中には外からは見えない問題もいろいろあったという認識はあったと思います。だから、開高さんの文章に対

して「そういうことはあったかしらん」と思ったと思いますね。あんまり記憶はハッキリしないけれど。七二年というとき、もうベ平連の後期ですからね。

水島…そこでまた「いつから」とハッキリした区切りを求めても仕方ないんですが(笑)、ただ大体いつ頃から、開高さんのような主張に聞く耳を持たなかったような状態から「そういうこともあるかな」と変わってきたのでしょうか。

「転換点」というと小熊英二さんみたいですが(笑)。

吉川…どうもあなたははじめをつけるのが好きだね(笑)。「転換点」はわかりません。徐々にということでしょう。内ゲバが片一方で起こってくるでしょう。次第に全共闘が崩壊をしていって、それから新左翼政党が次々と孤立していき、ベ平連もスタミナをだんだん失ってあんまり人が集まなくなってくる。それと並行して、社会主義陣営のダメさ加減が明らかになるようなことが起こってきて。そういう中で徐々に人々の認識というのは変わってくわけでしょう。

●カンボジア問題・文革評価

吉川…一方で栗原さんあたりは非常に明確に意識してたんでしょね。これはベ平連以後になるけれども、カンボジアのベトナムとの抗争が起こったり、中国のカンボジア制

裁戦争が起こつたりしたときに、小田さんと菊地昌典さん、福富節男さんや私なんかは、カンボジア問題についての共同声明を出したわけよね（資料に収録）。それに栗原さんは真向から「賛成しません」と言ってきた。これはベ平連以後ですけど、そこでは旧ベ平連の主要メンバー、いわゆる旧「内閣」メンバーの中で、明瞭に事態の認識についての分離が起こっているんですよ。そのときに声明に賛同しなかったのは、武藤さんと栗原さんで、その二人は入らなかった。あ、鶴見俊輔さんと鶴見良行さんもそうでした。署名に入っていません。

天野・武藤さんのスタンスと栗原さんのスタンスは同じだったんですね。

吉川・その共同声明に入らないという限りでは一緒だったという気がします。この声明は後々尾を引いて、元「朝日ジャーナル」副編集長の井川久さんと僕との論争に続いていきます。吉川はボル・ポト派を全面的に支持していたから、インドシナ三国人民に謝れ、なんていう文章を井川さんは公表するわけです。僕は仰天したよ。私が「ボル・ポト派だ」ということだけは後に井川さんは撤回したけれども、にもかかわらず吉川は間違っているというのは直さないわけですよ。その論争で井川さんが根拠にした一つがその声明なんだね。声明に菊地昌典さんが入っていたので、全体がボルポト支持派だと思ったんじゃないかな。菊

地さんはその頃ボル・ポト派擁護だったから。もう一つは、これは個人的な関係なんだけど、何年だったかに東南アジアをたまたま回った時に、友人の記者を訪ねてバンコックの「朝日」の支局に寄つたら、たまたまそこにカンボジアを取材して帰ってきた井川さんがいた。「吉川さん聞いてくださいよ。大虐殺で何百万人ものが虐殺されて」と言い出したから、「ちょっと待ってよ。一体何百万なんて、あなた自身で、勘定したの？」とチェックしたんだよ。そういう数字はオーバーに伝えられるのでそう簡単に「うん」と言うわけにはいかないよ。それに井川さんはものすごくカチンときたんだろうな。彼は虐殺で頭が一杯になってたんだから。それで私もボル・ポト派にされちゃった。それは彼の思い込みなんだけど、そういうわけでこの共同声明は後々まで尾を引きますね。栗原さんはその声明になぜ加わらないかという主旨をAALAのハガキ通信「週刊ボストカード」に書いてます。これは吉岡忍さんが編集したものです。栗原さんが先に二回批判を書いて、僕がそれに一回反論して、それでやりとりは終わっています（資料に収録）。ともかくそこでは旧ベ平連の中でも分岐が起こつてますよ。ベ平連を終わつたときに、今後はそれぞれの立場で自由に行動してゆきましょうという申し合わせをしたのですから、別に裏切つたとか分裂したとかいう問題ではありませんが。

天野…こんなこと言うとな怒られるかもしれないけれども、武藤さんなんかはどちらかというと虐殺を支持なんかしているわけないけど、気分的にはボル・ポト派弁護寄りだったんじゃないかと思うのですが。反米帝一本やりで。

吉川…どちらかといえば、そうだと思いますよ。

天野…それではその時は栗原さんと同じ立場だったとはいえないのでは。

吉川…ええ、たまたまその声明に加わるか加わらないかというだけで一緒だったということでしょう。思想的な点ではかなり違うと思いますよ。武藤一羊さんと花崎皋平さんが『展望』にずっと連載していた文化大革命論、造反有理や特に自力更生論、これは当時非常に影響力を持ちましたからね。そのやりとりは『展望』が廃刊になるんで中断しちゃうんですけど。

天野…最後の回がゲラ刷りで出てますよね。

吉川…ゲラだけ出て終わりになっちゃったんだけど本当はもっと続くはずだった。そこでその二人は、言ってみれば文化大革命、特に自力更生の全面支持の論を展開したわけで、それは新左翼の中で非常に影響力を持ったんですよ。吉田和雄さんと話したら、彼は赤鉛筆で線を引きながら毎号読んで言ってました。僕もかなりあれには影響を受けた。このことを、武藤さんも花崎さんもまだ整理してないですね。

天野…僕は武藤さんに一度、どうしてあれは中断しちゃったのか聞いたんです。

吉川…それは『展望』がなくなっちゃったからでしょう。

天野…それともう一つは、中国の文革評価の転換みたいなことがあって、やりようがなくなっちゃったんだというようなことを僕に言っていました。

吉川…それならそれでちゃんと始末つけてくれないとね

(笑)。

天野…僕がここで悪口を言うのは憚られますが(笑)。

吉川…言ったけど違つてきちゃったからやめちゃったというのでは、それまでの責任が問われますよね。僕はちゃんと始末をつけてほしいと思う。花崎さんにそれを言ったら全く気にしてまず、いずれ、ちゃんとした総括をやらなきゃと思っている、と彼は答えましたけど。

天野…対談というよりも二人で書いた一つの論文なんですよ。

吉川…花崎さんはそれを痛感してるようです。でも武藤さんからあまりハッキリとした意見は出されていませんね。P A R C から出てた雑誌『世界から』でカンボジア問題なんかをとりあげたときも、この問題が残ってますよね。ボル・ポト派支持ではないけれども、ボルポト派の大虐殺だけを宣伝するような立場はアメリカ政府の説に乗せられてるんだという姿勢というか、認識というか、それが編集方

針の背景にはあったように思いますよ。PARCはポル・ポトもそれを批判する方も相対化するという立場をしばらくとつてたと思う。

天野…もちろん、アメリカも問題だったでしょうが、この件は自力更生経済路線など、フランクやアミンの「従属派」の理論、そして文革のロマンと関係していて、中共派の人たちはカンボジア共産主義をバックアップしている構造でしたよね。

吉川…そうですね。中国が進めた文革は、永久革命に通じるものがあるという認識というか、期待があつたんですね。革命政権が成立して権力をとつても、絶えず下からの批判とチェックを組織していかない限り、政権は腐敗堕落する、それを防ぐには、不断の下からの権力チェックが必要なので、文革はまさにそこを下から実行しようとしているんだという認識、あるいは期待です。それをさらに徹底してやろうとしているのがポル・ポトだということにもつながってゆくんですね。都市をなくして、都市と農村の区別を全廃するという話なんですから。

天野…都市の殲滅ですからね。

吉川…そう。これは徹底してすごいじゃないかという評価にもなるわけです。文革に対する肯定的な姿勢がそのままポル・ポトにつながられ、ポル・ポトは文革をさらに進めるといふ実験をしているんだと思う傾向も生じた。

天野…自力更生経済論という点では、北朝鮮の肯定的評価とも連動していたとは言えませんか。

吉川…ポル・ポト派に比べると、あんまり北朝鮮が出てこなかったのは不思議だね。

天野…ただ、オーストラリアのマルクス主義、日本研究者とかああいう人たちが書いたものではあつたんですね。

吉川…オーストラリアにはあつたかもしれないね。しかし日本の場合に、あんまり北朝鮮が注目されなかったのはなぜだろう。

天野…日本の場合には確かにあんまり北朝鮮の話はなかったかもしれないですね。ただ小田さんの「私と朝鮮」なども、その文化の系譜だと思いませんか。

吉川…小田さんのそれはそう言えるでしょうね。小田さんと影書房の松本昌次さん、あと安井郁さん。ただ安井さんとなるとこれはもう金日成万歳・主体思想万歳になっちゃって、共感はほとんど呼ばなかったと思いますけど。主体思想への共感では安井さんの他に西田勝さんもいましたね。かれらは何度も北朝鮮を訪問します。

天野…本としては小田さんのものが決定的ですね。

吉川…小田さんのが一番影響力を持ったでしょうね。ただ、小田さんの場合、お連れ合いの親族が北朝鮮にいて、その安全が小田さんとの関係で脅かされるのを、小田さんは必死で防ごうとしていたという側面も見なければならぬ。

しょう。

さつき言ったように、中国については武藤さん、花崎さんの主張は非常に大きな影響力を持ったのですが、それに比べると安井さん、西田さんの主張は、あまり影響力をもたなかったですね。安井さんのは主体思想万歳が過ぎたんでしょうね。だけど言われてみれば、確かにそうした流れの中に北朝鮮はあんまり位置付けられなかったなあ。

天野…そう言えば吉川さん、W・ヒントンの『翻身』（平凡社）の共訳者に入ってますよね。

吉川…ええ。四人のうちの一人です。

天野…共訳者になったのはどういう経緯ですか。また、あの時代のヒントンの認識というのはどうだったんでしょうか。

吉川さんにとってどんな感じだったんでしょうか。

吉川…いや、もうすばらしいという感じで。あれは初期の中国の農村革命全体の話ですから。僕はあの記述は事実に基づいていると思うんだ。ヒントンの評価は合っている面というのが非常にあって、いかに紅軍あるいは毛沢東の共産党が、農民を組織したか、農民がその中で変わって「翻身」してゆくか。人民の立場に立った三大規律・八項注意とかあったでしょう。

天野…エドガー・斯诺の線ですね。

吉川…あの線ね。そこは僕は立派だったと今でも思っているんだ。

天野…ただだけど、毛沢東たちは徹頭徹尾軍人ですからね。後の時間になって考えれば、軍事思想との関係でどうだったのかという問題はやはりあったんじゃないですかね。

吉川…かもしれない。だけど当時としては、これはすばらしい、これだから革命は成立したんだという理解でね。

天野…ヒントン自体も文革へのロマンの文化として出てきていますよね。

吉川…でも、文革の話、その後にヒントンの『鉄牛』や『百日戦争』（共に平凡社）というのを出しますね。『百日戦争』になってくるともう僕はちよつとどうかなという感じだった。

天野…ああ、吉川さんはそういう感じだったんですか。

吉川…ええ。『翻身』は中国革命の初期の話なんですよ。権力を取るに至る過程の中でどういうふうにも農民が変わっていくのかという話でしょ。そこは非常に共感を持って訳しましたね。一方、『鉄牛』（平凡社）では、ヒントンは日本語版への序文や「あとがき」で、劉少奇批判や「農業は大寨に学べ」などへの肯定的評価を書いているでしょ。『百日戦争』では文革擁護がさらに強くのべられますね。ヒントンがアメリカの中で孤立しながら米中人民友好協会の責任者として必死に頑張っちゃってるわけですが、ちよつと違うなという感じを僕は受けましたね。

ヒントンを訳したのは、東大の教員だった中国学者の加

藤祐三さんが鶴見良行さんのところに共訳して欲しいと持ち込んだんですよ。ところが鶴見さんが忙しくて、吉川おまえやれよと僕のところへ振ってきたんです。僕は承諾して読んでみたら、これはすごい文章だと思った。あれは感動しながら訳した記憶がありますよ。

それから、個人的なことなんですが、こういう本があるんです。野原四郎・幼方直吉編「愛と革命と青春」（平凡社）、出たのは一九五六年。この中の「村の政治の中で」という章を書いている「南条祐子」というのは旧姓で、後の私の連れ合い、吉川祐子なんだよ。

天野…そう言えばおつれあいとの関係で吉川さんは中国と縁がありましたね。

吉川…そう。結婚前に彼女が書いて、本をもらったんだね。これを読んで、共感して、彼女に心から感動したなんていう返事をすぐに書いた憶えがあるよ。これはね、彼女の経験としては誇張もないし全く事実だと思う。実際彼女も北京大学にいるときにこれで中国共産党に入っちゃうんだから。それに「翻身」が重なったというところもあるなど、たまたま今思い出した。まったく個人的な事情だからわざわざ言う程のことではないんだけど。

ともかく、そういう影響もあったから、中国の初期の革命、特に農村の革命や地主への糾弾には非常に共感を持っていた。僕も文革を受け入れる余地は非常に強くあったわ

けよ。武藤さん、花崎さんの論も当時は全くそうだと思っ
て読んでいたんだから。

●「解放戦線」支持への傾斜

水島…ベ平連の開高健問題の話に戻りますが、「市民運動とは何か」（徳間書店）の中に「平和の船」についてのやりとりがあるんです（二八四～二八七頁）。永沢孝さんという方が「平和の船」は絶対に正しいのでしょいか…戦争当事者の一方にだけ支持を与えることは、アメリカ政府の場合と同様に、戦争当事者をふやしてしまうことになりはしないでしょうか。…反対側「北」に味方することは、彼らの戦争行為を肯定してしまうのではないかと思うのです。…むやみに戦争当事者になるべきではなく、…両陣営に含まれているベトナム人民の苦しみを思うとき、私は両方の指導者を非難せずにはおれないのです」と問うています。

吉川…今言われても憶えてなかったけど、非常に開高的な立場だなあ。

水島…そうですね。それに対して関谷滋さんが「真の平和、真の幸福のために私達一般市民は民主共和国、解放戦線に連帯の手をさしのべるべきです。…「北側の」テロによる犠牲は残念ですが、いたしかたないのではないでし

ようか」というような回答をしています。こういうやりとりがベ平連の本に収録されているということ自体の中に、当時これが一つの争点になっていたということが表れているのかと思いましたが。

吉川…関谷さんの回答のような考えが、当時ベ平連の主流だったと理解していいのではないですか。

水島…このやりとり以外に何か議論が起きた記憶はありませんか。

吉川…ないですね。今言われるまでは忘れていたけれど、そういうのがあったというのも不思議ではなくて、当時はそういう雰囲気だったですよ。

天野…ついでながら、「市民運動とは何か」にも収められている開高さんの「東京からの忠告」という文章も、「ベトナムに平和を」と言うときに、北のことを含めて言っているのか南のことを言っているのかということにかなりこだわっているんですよ。だから彼ははじめからそういうこだわりを抱えていたわけですね。

吉川…そうだと思いますね。

天野…それについてベ平連の中であまり討論されなかったんでしょか。

吉川…討論されなかったですね。彼が言っても、みんな「うーん、そうかなあ」みたいな調子で扱うから。

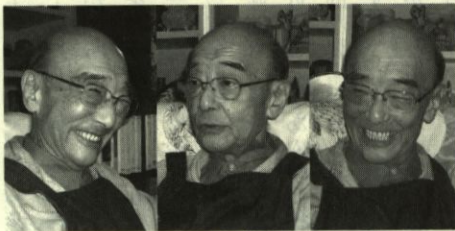
天野…ただ、「一般」の世の中、左翼文化でないところでは、

開高さんのスタンスというのはいわば当たり前みたいなのところもあつたんじゃないでしょうか。反共宣伝も大量にありましたから、アメリカも悪いけれど向うもおかしいというような言い方はあつたように思います。それなのにどうして全く受け止められなかったのか不思議なんです。

吉川…僕は世間の評価がそうだったとは思わないですね。ちゃんと調べてみないとよくわかりませんが。確かに政府は盛んに反共宣伝しましたよ。だけど一般の新聞が反共宣伝を一所懸命やつたというふうには思いませんし、どちらかと言うとアメリカが悪いという論調ですね。それに影響を受けた人々も「ベトナムはかわいそう、アメリカはひどい」であつて、解放戦線側もひどいとはなつていなかったと思いますね。右翼や政府側の論客を別とすれば、一般世論の中にそういうものがあったという記憶は、僕にはない。たとえば代表的論文として誰が何を書いたか、何かあります。

天野…しかし、解放民族戦線を支持するというトーンでも必ずしもなかったんですよ。

吉川…そうではない。しかしよく



引越後の整理で忙しい、エプロン姿の吉川さん

戦っているという評価ですよ。

天野…アメリカがひどすぎるといのがもちろんありますね。

吉川…もちろんある。だからベ平連も最初は基本的にはそこだったんであって、それが徐々に今度は解放戦線支持になっていく。だからやっぱり初期の世論の中に、解放戦線も悪いという意見が強くなったとは、あんまり思えませんね。むしろ単にアメリカがひどいというのを乗り越えていく過程だったと思うんですよ。右や左の問題じゃない。そういう方向に世論が流れていく過程が六五〜七年くらいなんじゃないかな。

天野…そうすると開高さんのスタンスというのはかなり独自ですよ。

吉川…一貫していましたよね、その限りでは。しかも右派になっちゃったわけでもなくね。そういう人は他にいなかったという感じだよ。

天野…それはある意味非常に不幸ですよ、時代的な問題として。

吉川…そういう論客は開高さん以外にいたかという、いないでしょ。桑原さんや松田道雄さんにしても、そういうことを全面的に論じたかという、必ずしも論じてない。

ただ松田さんの場合は、軍隊批判ということとあわせて少し論じていたかもしれないね。ロシア革命についての松田

さん独自の評価もあるから、社会主義万歳じゃないわけだし。だから松田さんの読み返してみたら、何か今から考え直すべきものが出てくるかどうか。あるいはアナーキストの埴谷雄高さんあたりがその辺をどう論じていたか。

天野…政治理論でいうと、黒田寛一みたいな反帝反スタ論だと、代理戦争論だとむしろズバって全部切っちゃう。そういう立場が一つはあった。吉本隆明も、反帝反スタ論はとっていないんだけど、それに近いことをあの時代書いていますよね。やっぱり代理戦争的な要素があると。

吉川…それで鶴見批判をやってますね。

天野…それはある程度根拠があるかなと当時ちょっと思った記憶が僕の中にあります。だからそういう論議が全くなかったわけではないと思います。ただ明確にあったかどうかは難しいですね。確かに一般世論も、侵略されているベトナムへの同情論の方が強かったですからね。

吉川…それが強くなっていく過程が、六五〜七年だったと思う。だから佐世保闘争などでも学生に手を叩いてしまうということになるわけで。その時に「警察も悪いが、学生も悪い」という反応は、マスコミの社説はそうでしたけれども、一般世論はそうではなかったと思う。羽田闘争まではそうじゃないですか。

天野…ただ、マスコミの反暴力キャンペーンは国内の闘争についてはすぐありましたけれどね。だから世論のそこ

ら辺の判断がどうだったのかというのは微妙だと思う。

吉川・僕はそういう理解ですけどね。あんまり実証的な話じゃなく印象としてです。

天野・次の共同行動のテーマとも重なりますが、一緒に運動を広くやるというスタンスの問題で言えば、ベ平連は単に「平和がいい」というような一般的なヒューマニズムを超えて、ある種ラジカルになっていったという整理があるわけですよ。これは栗原さんへの聞き書きにしても他の人の発言にしても。それはそれで成り立つ文脈があると思うんですが、その中で開高さんの意見が落ちていっちゃったということは考え直す必要がある。それは、運動が深化したというより、運動がある方向へ広がっていったという経過の中で落としてしまった重大問題があったんじゃないですかね。

吉川・当然そうですよ。むしろ傾向としては、これは全共闘が提起したことではあるけれど、「内なるベトナム」という認識。それと小田さんの被害者→加害者の問題。そういう方に流れていくわけで、それはそれで僕は正しかったと思うけれども、それが一方では開高さんのような立場を切っていくという結果になったんでしょうね。それから、向井孝さんの非暴力直接行動論もあった。向井さんはずっと一貫しているんだけど、じゃあこれがベ平連の中で大きく取り上げられていったかというのと、そういうことに

はならなかった。鶴見良行さんの国家を超える議論というのも、初期から鶴見良行さんはずっと言っているんだけど、これもベ平連の中であまり重視されていかない。

天野・そうですね。今読み返してみると、その主張は鶴見良行さんが一番シャープだという感じがしますよね。

吉川・ええ。それがもっと重視されて中心に据えられれば、随分違った展開だったと思うが、実際にはむしろ除外されていく。除外といっても除名とかそういうのではないけれども。たとえば、鶴見さんがそういうことを言うと、それは違うよと武藤さんが言うわけ。

天野・『ベ平連』（三一新書）の座談会もそうでした。これは典型的によく出ていますね（笑）。

吉川・そこには一番よく出ている。武藤さんが全部切っちゃってますね。

水島・武藤さんが他の人を批判する代わりに押し出している立場は何なんですか。

天野・そんなにポジティブなものをここでは武藤さん出してない。ただ、鶴見さんがそういうスタイルで整理することを「違う」と強く判定している。

吉川・だから僕は『鶴見良行著作集2 ベ平連』（みすず書房）の解説で、当時これがもう少し取り上げられていたら違った展開だったと書いたんですよ。

天野・僕もその点は全く同感で、あれを読ませていただい

でもそう思いました。著作集の方も鶴見良行さんって実にくニークな仕事をした人だということがわかる本でした。

●共同行動の原則

天野…今日聞かなければいけない話のもう一つは、「運動〈経験〉」の二〇号で吉川さんに書いていただいた、共同行動のルールの問題です。あそこには、「ちゃんと天野に聞かれたことがない」と書かれています…。

吉川…インタビューではいつも意地悪いことしか聞かれない。そして僕への評価になると栗原さんと一緒になって吉川はダメだと（笑）。今まで全部そうだもん。天野さんも栗原さんも、大きな共同行動の有効性というものにあまり関心がないようです。

天野…それは違いますよ（笑）。ともかく、六八・六九年に六・一五の大統一戦線というのが実現したということがあったわけですけど、そのプロセスで共同行動のルールの話が出てくるんですか。

吉川…それ以前の六五年から共同行動というのはあったわけね。安東仁兵衛さんが苦勞して、共産党から社会党、ベ平連のような新しい市民団体から新左翼党派系まで全部入れた一日共同行動が六五年の六月九日にあった。

天野…中野好夫さんたちの呼びかけですね。

吉川…そうそう。しかしそのときは社会党も共産党も総評も全面的に入ってるんだけど、既にそのときに、新左翼を除外しろという意見が共産党系からあり、総評も同調して、かなりそこで安仁さんなんかは苦勞するんだよね。その流れがあつて六八年に、これは僕と日高さんとで相談して、日高さん、新村猛さん、阿部知二さんなどの呼びかけで六月共同行動をやるうということになった。そこから始まるんですよ。そのときに日高さんが強力に主張したのが「多様性の統一」という考え方で、当時としては非常に新鮮な呼びかけだった。それは、共産党の方針、あるいはそれ以前の反戦運動・平和運動を支配していたそれまでの古い統一戦線論を正面から批判するアンチテーゼとしての提起だと僕は受け止めた。この線を伸ばさなきゃいけないと思って、日高さんを全面的に支持して動いたわけなんです。そのときに中心でいっしょにやったのが大沢真一郎さんで、彼は日高さんのいた国民文化会議の事務局長格だったんだよね。この共同行動は国民文化会議を本拠の事務局として始まる。そこに僕達の、模索舎を作った五味正彦さんなんかが詰めて、五味さんがもっぱら学生ベ平連に訴えて「ベ反学連」を組織して、それが支えるという構造をつくったのですよ。

六五年の六・九共同行動というのは、かつての社共・総評の共同行動の全くの継続で、そこにどうやって新日本文

学会だの新左翼党派系を組み込ませるかというので安東仁兵衛さんがえらい苦勞した。六五年は、やっぱり社共・総評が主流だったんですよ。だけど、明らかにこのままじゃうまくいかないということがわかってきた。一方で今後ともこういう大規模な行動は必要だというので、六八年の六月行動が始まる。呼びかけの中心は日高さんで、「裏で画策した」というのとは違うのだけど、呼びかけ人に阿部知二さんと古在由重さん、新村猛さんらに入ってもらいたいというのは僕の意見だったと思う。古在、新村さんは二人とも明らかに共産党系でしたからね、この二人が呼びかけ人に加わってもらおうことで何とか全体をつなげられないかと思った。

天野…それはベ平連の事業ということとは別なんですか。
吉川…うん。「私はベ平連の吉川」ではあったけれども、ベ平連そのものというよりは、むしろ別個にそういうものを呼びかけて共同行動の主体がつけられ、それを受けてベ平連が動き出す、そういう仕組みを作ったわけ。最初のときはベ平連は前面に出てないです。六八年五月一六日に第二回目の準備会議が厚生年金会館であるけれども、これが問題の会合だったと思う。厚生年金会館でやったことは非常に明瞭に憶えているんだ。ここで、共産党系の団体とのやりとりで仰天したことがあった。これは福富さんも書いているし、僕もいろんなところに書きましたからご存知で

しょう。つまり、呼びかけには新村さんも古在さんもいたことだから、共産党系の文化団体連絡会議とかいう、共産党系の市民グループも会議にかなり来ていた。そこには、職能別市民グループというのがいくつも参加してきて、詩人会議とかりアリズム写真集団とか画家の集まりだの民主文学だの……。それらが私たちと一緒になって会議に参加していた。一方で新日本文学会も来ていた。そのとき、「新日文は反共団体だから、これを実行委員会から排除せよ」という要求がその文団連系の団体から一斉に出たわけ。「それはできない」というのが、もののべながおきさんや福富さんや大沢・私などの反論。多くの市民グループの反応もそうであって、共産党がそう主張するのはわかるけれど、言うのはいいが出てけというわけにはいかないと。「来たいという人はみんな入れるんだ」と言ったら、そのときにかれらが提案したのは、「じゃあ民主文学をおろすから、それと見合って新日本文学会も、両方おろすというのでどうだ」と。これは仰天すべき提案だったね。他の人もみんな驚いて、団体をまるで将棋の駒みたいに扱って何だ、ひどいもんだと呆れかえったことがあったわけですよ。もつとも、それ以前にはそういうことが大組織の間では当たり前だったんですね。六〇年の安保闘争のときに、安保共闘国民会議というのがあって、中心メンバーとしては、社会党・全学連・原水協などだけど、共産党だけは正式メ

ンバーにはされなかった。大勢力であって、共産党を無視しては何もできないにもかかわらず、正式メンバーではなくオブザーバー。これ自体が実際にあわないおかしな話でした。しかし共産党代表は毎回来ていて、正式メンバーそのけのイニシアチブを発揮してはいた。ともかく、そういう国民会議に、たまたま平和委員会の代表者が都合が悪いときに、代理で僕が何回か行ったことがあるんだけど、そこがまさにそういう会合なのよね。全くの取り引き。たとえば次の国民会議主催の大集会の演壇上には誰を並べるか、議長と司会者を誰にするかということになると、こっちは平野義太郎を出す代わりに、向うは高桑純夫を出す。それでいいとなると後は一人ずつそれぞれから出していった、ダメなのが出ると「そっちをおろす代わりにこっちもこれを下ろす」みたいな取引交渉になるのね。そういうことだけで二、三時間費やす。なんだこれはと僕は思ったね。これが何十万という人を動かしている勢力の最高機関かよと驚いたことがあったけれど、ベトナム反戦の共同行動の場でもその再現なのよね。

だからかれらにとっては当たり前の文化だったんだろ。けれども、市民運動にとっては仰天するわけだね。それは絶対に認められないと言ったら、日本科学者会議だけを残して全部脱退しますということ。共産党系は脱退しちゃった。日本科学者会議だけはつなぎとして残ったのか、ある

いは学者だから脱退するとは言えなかったのか、よく知りませんが。そういう中で共同行動のルールというのを作りあげていくんです。途中で何度も手直しして、だんだん洗練されていきますが、日高さんの「多様性の統一」という運動のあり方を組織的に表現するところなるかなあと思うようなものを文章化しています。大沢さん、福富さん、五味さん、そして僕などが日高さんと相談しながら練り上げていったという感じですね。詳しくは福富さんの本（『デモと自由と好奇心と』第三書館）に入っていますから参照してください。

この共同行動のルールというのは、今となつては当たり前じゃないかと思えるような内容だけれども、しかしイラク反戦の初期のワールド・ピース・ナウなどでは、こういう経験は全然重視もされなきや振り返りもされなかった。でもここには大事な原理が含まれている。たとえば、自分のグループとしては、重要だし、ぜひやりたいと思う行動形態があるならば、制約を受けることなく自由にやってもよろしい。ただし条件があつて、他団体をその意に反して巻き込まないこと。それから何をやるかについては相互に事前の了解があつて、それに反対の人は行かなければいいと。相互に干渉しあつて相手のやることを妨害したり、不本意に取り込むようなことだけは避けなきやいけない。自らの責任で自らの行動形態を選ぶ、その限りにおいて全体

としては統一したものとして組織され除外はしない。これはかなり重要な原理だったと思う。それは、共産党系の排除論に対抗するものをどうやって作ろうかという中で実践的に練り上げられていったわけです。その原理が参加者をさらに拡大していく。

あるいは、平等の論理というか、国連総会の国の大小に関係なく一国一票というのに似ているルールもある。つまり、どんなグループでも参加できるとなると、中には二人の会なんていうのもあって、それと何万、何十万人を擁する大組合とが政党でも、全体の実行委員会の中では同じ一票、平等の発言権を持つと。これは大組織からすれば認められるかという話になるんだけど、みんな一律参加費用円と払っているわけだから、二人の組織だろうが何万の組織だろうが平等だとしたわけ。そういう原理というのはそれまで全くなかったわけだね。そのときに初めてつくりあげていったという感じですよ。それまでの共闘組織では、金の力もありましたし。大金を出す政党や大労組は、それに見合う権限を持つんです。これは今でも政党や労組が中心の共闘では続いていますね。その後の市民団体の共同行動というもののあり方、つまり、どのようにして他の団体と協働して、全体としては異なるグループが一つになりながら成立させていくかという点では、かなり大事な基盤をつくったと思います。

天野…その後の内ゲバ時代をくぐった後に、福富さんなんかと一緒に反天皇の共同行動を作ったときは、今吉川さんがおっしゃったようなルールをそんなに明確に作ったわけではないけれど、だいたい形態としてはそれなりの了解がありました。後に文書をまとめるときにも、福富さんを含めてそのような内容をまとめた記憶がありますね。

吉川…そこらは、市民運動の中では前提となる了解事項になっていくわけですね。今でも共産党は認めないでしょうが。

天野…そりゃそうでしょう。

吉川…とにかく厚生年金会館でやったその会合で本当に呆れかえったのだけは明瞭に記憶にありますね。

天野…全共闘運動、大学の現場の方から見ると、時代としては共産党とはバチバチになっていく時代だから、そういう分岐はいわばいたしかたなくなる時期ではありましたね。吉川…ええ、僕もそれは必然だと思っね。無理に一緒にやっていたらどうにもならなかったと思う。現場でトラブルが起こったに決まっていますからね。

●政治効果が実存か

吉川…共同行動のルールに関連して、この前も天野さんとも少し議論したことです。僕は運動を政治的なものだと

理解しているんですね。ベトナム反戦運動は政治運動だと。したがって我々が選ぶ行動が、政治的にどのような効果を持つかということが重要で、それ抜きに行動形態を決めるわけにいかない。僕は一貫してそういう考えなんですよ。共産党出身ということもあるでしょう。しかしそれに対して、特に後期の日大全共闘の人たちは全然違った。政治的効果なんてことを考えているから墮落するのであって、その典型例が共産党だ、効果だけしか考えなきゃあなるんだと。問題はいかに闘うか、いかに自己をその中で確認し確立するかだと言う。僕の方は、この運動は自己の実存確認運動でも、自己確立運動でもない、ベトナム反戦のためにどういふ政治的効果をもつのかという評価を抜きにしては計算できませんという意見で、六九年夏の大阪での「反博」大討論の中では、それは最後まで全く一致しませんでした。

天野…平行線になっているんですね。

吉川…だけど、共同行動の原理というのも、そういう政治的運動の意味でつくったんであって、自己確認するためにそういうルールが必要だと思っただけではないわけだよ。しかし同時に、そういうルールのおかげでそれぞれが好きになようにできたから、その中に自己確認運動も組み込まれるわけですよ。そう思って参加する人がいてもいいわけだから。

天野…だから逆に言うと、やりたい者は他団体個人に迷惑かけない範囲でやれるというのは、そういう意味では、自己確認運動もそのルールの中に入っているとも言えますよね。

吉川…入ることが可能な仕組みを作るわけですよ。だけどそういうふうに関わり合ってきた全体としては自己確認運動ではないというのが僕の理解だった。それがどういふふうな政治的影響力を持つかが第一に重要なのであって。そして実際僕はかなりの影響力を持ったと思うんですよ。江田三郎さんなんか強い衝撃を与えたわけです。「中央公論」なんかの総合雑誌の座談会で、こういう市民グループと今後いかに共闘するかということ、社会党としては真剣に考えざるを得ないということを確認江田さんは発言していたと思う。それから警視庁ですよ、仰天するのは。秦野章さんだったか、あの時の警視総監が、この市民グループのインシアチブによる行動は予想外の集まりであった、見直さざるを得ないと言ってますね。だからかなり政治的影響を与えたと思いますよ。

天野…僕もそれがわからないわけじゃ全然ないんですけど。ただウエイトの置き方の問題で、原理的に二律背反の関係ではないと思うんですよ。自己確認や自発性と政治の論理というものが。

吉川…だから排除するんじゃないけど。全共闘側はそれ

じゃ満足しないのよ。全体がそうなるべきだというのがこれらの要求で、ベ平連もそうならなきゃいけないと。それは認められないわけよ。

天野…それは日大全共闘ですか。

吉川…「反博」のときの日大全共闘です。つまり小田と吉川はその点が欺瞞であって、そこを自己批判せよと迫る。「俺たちは俺たちだ」じゃないのよ。「俺たちは俺たちだ」なら、違うスタイルのベ平連とどう共闘するかという論理になるけど、そうじゃないわけ。おまえらもそうなれ、ならない限りインチキだという批判だから、これは認められない。

天野…そこでぶつかるのはしょうがないですね。

吉川…僕はしょうがないと思っただけ。だから覚悟して議論やっただよ。

水島…その対立の中で、小田さんは吉川さんのスタンスに寄り添って応答されていたのですか。

吉川…そうですね。僕の論理とは違うけれども、彼は彼でだいたい自分は非暴力だと。ゲバ棒も持たないしヘルメツトもかぶらないと、むしろ彼はその線でしたね。

水島…ただ、自己確認運動というのは自分の内部で問い詰めていくわけですから倫理主義的なものですね。小田さんの運動論というのも、一方で「遊び」の要素もあるわけですが、他方で疎外的な社会状況の中で自分に立ち向か

わなきゃいけないという論理を割と早い時期から出して、その点で全共闘的な自己確認運動と共振する要素があったんじゃないかと思うのですが。

吉川…今言われて気づいたけど、小田さんは「疎外」という言葉をほとんど使わなかったね。なぜだったんだろう。

天野…自己確認と言うべきかどうかはともかく、全共闘側はある種の個人主義ですよ。その文化では小田さんも同じベースに乗っていた部分はあるんじゃないですかね。僕も日大全共闘だから、どちらかと言えば自己確認型の方だったわけですが。

吉川…全くそうですね。だけど、個人主義で、俺は俺、他人は他人だと。それはそれぞれ己の信じることをそれぞれ勝手にやったらいいじゃないか、だけど、それを他に強制したり、他をひぼうし介入したりしてはならないというのが小田さんの意見なんだよ。ところが日大全共闘はそれを許さないんだから。おまえも俺みたいになれ、というのだから。そこは違うと思う。個人主義じゃないのよ。むしろ普遍主義なんだよ。俺を普遍にしろという要求だからね。そりゃ無理なんですよ。

●改憲反対運動の豊富化のために

天野…最後に、現在の「改憲」に反対する運動についてお

話を伺いたいと思います。安倍がこけた後もまた連立騒ぎが出てきて、結局改憲に向けたいろんな動きというのは全然止まっていない。むしろ明文改憲のプログラムとしては変なりアリティを持ち出しているんじゃないかという嫌な状況ですよ。

吉川…参議院選挙があつて安倍政権が瓦解した後、意見の分歧が「市民の意見30の会」でも少し見られた。事態をどう評価するか、つまり、これで安倍のような強硬な路線は遠のいた、というのと、そう簡単に警戒心を緩めるわけにはいかない、まだまだやばいという意見が拮抗していたところが、連立騒ぎの小沢の辞意およびその慰留をめぐつて、やっぱりやばいねというのが見えてきたんでね。

天野…見えましたね。

吉川…やはりそうした議論はやつておいて良かった。その時点ではあまりハッキリはしていなかったし、あれほど民主党がひどいもんだという認識がなかったね。僕はむしろ解散へ向けて民主党が押していき、そのときに当然二大政党制に議論が収斂されちゃうのに、どう対抗するかという方が大事ななと思つていた。もちろん今後もそれは依然としてそうなんだけれども、こんなに民主党がひどいもんだというのは、改めて認識し直した感じだね。そうすると来年度の「九条実現」の意見広告というのは、別の意味で非常に重要な意義をもつてきちゃったなあとと思う。安心感から

「手抜き」が出てくるのをどうやつて防ぐかと困つてたんだけどね。そして、二大政党制と選挙制度の問題についてもう少しウエイトを置いて触れるべきかしらとも思いますがこの選挙の枠組みを壊さないといけない。選挙となればマスコミはもちろん全部二大政党制論でしょうからね。民主党と一緒に、マスコミは一瀉千里でそこへ向かつて駆けていくことになるのでしよう。

天野…九条の会の運動とか、そういう形で広がつてきている一連の流れも踏まえて、この局面で何が課題でしょう。吉川…九条の会については、これまでもずっと言つてきたんですが、特に小田さんが死んで以後のことがかなり不安ですよ。推進力が小田さんだけだったとは言わない、事務局長の小森陽一さんも実によくやつてると思いますよ。彼も「ニューヨーク・タイムズ」意見広告運動のときの開高さんじゃないけれど、全国を飛び回つてるでしょう。大学の教授やりながらよくあんなこと一緒にできるなあと思うけれど（笑）。しかし、九条の会を全体としてどうするかというイニシアチブがまだ見えてこないですよ、小森さんにしても高田健さんにしても、そこのところをどう考えていられるのかがあまりよく見えない。だから、九条の会は小田さん亡き後、どうなるのがすこし不安なんです。そもそも小森さんを事務局長にしたのは小田さんの発意だったんですよ。最初に呼びかけ人の九人が集まっ

た時に、「小森、おまえ事務局長やれよ」と言ったら、他の人も賛同してその場で決まっちゃったそうです。そういう積極的イニシアチブを発揮した小田さんがもういない。

あの九人の中で運動の現場がわかっているという人は、小田さん、その次が鶴見さん、それを除くとあまりいないんじゃないですか。そうすると小田さんが亡くなっちゃうと、そういう推進力がなくなっちゃったという感じなんですよね。肝心なときに誰が方向性を打ち出すかというね。全国活動家交流会というのが近々あるそうですが、そこでどんな線が出てくるか。

天野…「インパクション」(一五七号)で渡辺治さんと対談する機会があったんですが、その時も僕は気になって渡辺さんにいろいろ言っただけです。要するに、自衛隊が海外に出ることに反対するという一点で広くまとまるというのは、もちろん僕も一般的に反対では全然ない。しかしそういう一番広い枠組みだけを主張して、九条の原理や平和主義の原理といった中身の問題、そういう思想的な主張をする団体やグループや個人がいなくなっちゃたらどうするんですか、というふうに僕は聞いたんです。そうすると彼自身は、自分はもちろん自衛隊違憲論者ですと答える。ただし九条の会としてはこういう枠でやるのだと。

吉川…小森さんもそう言うね。

天野…だけど実際は、そういう原則的な主張がどんどん後

退している、あるいは落ちてくるわけですね。共産党自体の主張としても。

吉川…落ちていくかどうかは知らないけれど、少なくとも重視はされていない。

天野…重視されてないですよ。渡辺さんたちには、それは自明だという前提で論理が組まれているみたいなんですけど。しかし自分たちがほとんど主張しなくなったら一体どうなるのかということについては考慮していないように思える。

吉川…そこでは指導性が放棄されちゃってる感じがありませんよ。枠は作る、場は用意するに留まってる。その上でどうしたいのかは提起する必要があると思うね。確かに、事務局が政治方針をじゃんじゃん出すというのはいいことじゃないのかもしれないけれど。九人(今は八人か)のイニシアチブがもっと明瞭に出てほしいと希望します。

天野…枠の保証のためにあんまり言わないようにした方がいいという配慮が、どうもあるんじゃないか。

吉川…配慮というか、一時は統制の感じが強くなってきたときもあるわけですね。その議論は出さなくていいことまで言われたわけだから。僕は以前ピースポートの吉岡達也さんとやりあったことがあるんだけど、それは今の問題なんだよね。議論した方がいいんじゃないかと僕が言うと、吉岡さんは正面から「反対です」と言うんです。今は九条

を守れの線で統一すべきで、自衛隊違憲論や自衛隊解体論のような議論をその中でやることは分裂をもたらさず、それは原水禁運動の分裂過程の再現だというのが吉岡さんの意見。個人的なやりとりなので公にされた議論ではないけれども、僕と吉岡さんのそういう意見の差が出てきた。今から三、四年前の話だったと思うけど。今は吉岡さんみたいな意見をあんまり表立って言う人はいないのかもしれないけれど、しかし空気としては似ている。つまり、九条を守るという場は用意する、しかしその中でどうあるべきかということについては、イニシアチブを取ろうとしない。結果として、幅は最大限に広くしなければいけないような場を用意することが、今度はその中で「特殊」な主張を掲げている改憲反対運動というのを煙ったがる、ひいては結果として排除することにつながる。たとえば反天皇制がそうだし、女性の権利や障害者その他の生存権とか、つまり二五条だ、女性の権利だ、教育の権利だなんていうと、そういうものは中心じゃなくて九条ですよとされてしまう。九条とそれらとの関係が不分明なんです。そこを積極的に九条の会が議論を展開しようというイニシアチブは今のところ發揮されてないわけね。むしろ抑える傾向にあるんじゃないかなというのが心配です。それは結果的に幅を広げることにならないのではないかと心配です。

天野…「多様性の統一」じゃないですよ。逆に、地方な

んかで天皇問題をやっている人たちが、排除されたという気分の方から、「俺たちは改憲派だ」と主張することに固執したりしてですね、変な構造になりかねない。それは非常にまずいですよね。

吉川…さっきの自己確認とか実存的立場じゃないけれども俺は違うよということをあえて言わざるを得なくなるわけだ。

天野…それはまったく関係的に不毛で、非常にまずいなど思っているんです。その形をどう作り変えていくかというのは、改憲に反対する運動が今後広くまとまるための一番大きな課題だと思うんですね。

吉川…自分たちのいられる位置がないわけだから、俺たちはお呼びじゃないんだなということになれば別の集まりを作らざるを得ないという気分も生まれちゃいますよね。

天野…開き直っちゃうということになる。極端に言えば、憲法問題なんて関係ないよみたいな話になりかねない。それは非常にまずい。そうではない運動を考えないといけない。ちなみに、僕の関わっている「反「改憲」運動通信」は反天皇制運動関係の人にいろいろ手伝ってもらってますから、天皇問題がいつはい入ります。

吉川…その反響はどうですか。そういう側面に対する反応は。

天野…共産党系の人たちでも購読してくださる方が結構い

て、最初少しはそれで反発がありましたけど、意外と読者は定着しています。

吉川…もうやめたという人はあんまり出てこないわけですか。

天野…最初は少しありましたが、基本的にはないですね。九条主義で行かなくちゃいけないと思ってるのはむしろ運動家の方の世界であって、意外に人々はそうじゃないんじゃないかと思います。天皇問題についても改憲との関係で初めて知ったという声も逆に入ってきたりするわけです。吉川…実際の生活の場に行けば行くほど、そういう問題とというのは全部つながるわけですね。

天野…女性、家族問題も生存権問題もそうですから。

吉川…町に住んでいて、「九条さえ守ればいい、生活は別」なんていうことを言っている人はいないわけですね(笑)。年金は打ち切られるわ、生活費は上がるわ、消費税がどうなるか、そうした問題と絡んで憲法が出てきている。それを言ったら幅が狭くなるなんて言ったら、町の中の運動なんて成立しませんからね。もう少し方向性が打ち出されていいんじゃないかなという気がしますね。ただ、いろいろな問題を機械的、並列的に並べて「諸要求貫徹」式になればいいんじゃないかと、もっと有機的なつながりがほしいのです。

天野…だから九条の会に外から期待するだけじゃどうしよ

うもないんで、別の流れというのをそれなりに準備しておくことも必要だと思いますけどね。

吉川…しかし分裂と思われないようにしないと。

天野…対抗的にやる必要なんて全然ないわけですからね。

吉川…あれを潰そうというわけじゃない。あれはあれで大事なわけですから。

去年から言い続けていることですが、九条の会についてもう一つ問題点があると思います。「九条実現」の意見広告運動は去年「読売新聞」に意見広告を出して、そこで議論を呼びかけて、それが「武力で平和はつくれない」(合同出版)の本に結実するんですけど、この本はものすごく売れているようですね。一方、九条の会の活動は、仲間がたくさん集まって良かったねという自己確認みたいな側面が強い。今まではそうだったと思うよ。つまり、「赤旗」を見ても九条の会が何千でできました、今や六千五百でできましたと書いてある。だけどそれは共産党の支部が一つずつ作ればそれくらいになるんでしょうから、地域に行けば行くほどそれとだぶっているところが随分あって、会の数がありますと言っても、日常的に活動しているのはそれほど多くない。「赤旗」では日常活動の例も紹介されていますけど、六千五百の九条の会が日常的に活動しているとするば、もっとすごいことが日本全国で起こってなければいけないわけで、やはりどちらかという年に一、二回、地域

なり職場の中で講演会をやる程度なんじゃないでしょうか。「〇〇九条の会結成一年記念集会」なんてのをやって「ではまた、来年の九月にお会いしましょう」みたいなことで別れる、そういう九条の会はかなり多いと思うんですよ。そこでは、「こんなに反改憲論者がいて力づけられました」という意見はたくさん出るけれども、改憲論者なり憲法に関心がないという人の中に打って出て、そうした人々とのやりとりがあつて相手を変えることができたのかどうかという、そういう検証はあんまり行なわれていない。署名が十万を超えましたとか、お菓子を作つて売つてますとか、そういう報告はあるけれど、やっぱり真向から改憲論者と向き合つて、その意見を論破し変えていくような動きが欲しいですよ。世論を逆転させていくような活動に九条の会が主力を注いでいかないと、僕は九条改憲反対が五割を切ることは十分あり得ると思うので。

九条の会で考えられる問題点はその二つですね。つまり、一つは仲間だけで集まつて、こんなに仲間がいたの良かったねという安心運動ではなくする。やっぱり打つて出て、改憲論者を変えていかなきゃいけない。多数派をどうやって獲得するのかという課題。もう一つはそのためにも内部で多様性が保証される、そういう改憲反対運動を展開しないと、豊かさがなくなつていく感じですよ。非常に平面的な運動になつてしまう。

天野…言われて思い出しましたが、「武力で平和はつくれない」を作ったときに、あれはできるだけ九条に特化しない方針だったんですよ。

吉川…そう。

天野…そういう編集方針でやつて、実は今よく売れている。考えてみればそうですね。

吉川…それで当たつたんだと思う。あれだけ北朝鮮問題を真正面から取り上げたのつて他にないでしょう。それから安保との関連で九条を取り上げている護憲運動つてあんまりないんじゃないですか。

天野…天皇、靖国問題もちゃんと入れてますからね。

吉川…天皇、それから生活、安保、北朝鮮、だから売れるんだと思うんだよ。だつて当然生活の場に行けばそういうのが問題になるに決まつてるんだもの。今の改憲反対運動をダメとは言わないけれども、このままで安心で任せておけるといふものになつてない、という感じじゃないですかね。

(二〇〇七年十一月三日、吉川勇一さん宅にて)

「吉川勇一（よしかわ・ゆういち）一九三一年東京生まれ。著書『市民運動の宿題』（思想の科学社）、編著『コメンタール戦後50年 反戦平和の思想と運動』（社会評論社）ほか。」

声明

私たちは、最近のインドシナをめぐる情勢の推移を、深い憂慮をもってみまもってきた。個々の事実関係にはなお不分明な点があり、複雑な歴史的背景がある

とはいえ、私たちがいだくつぎのような判断には、心ある人びとの共感をえられると期待している。私たちは、この憂慮と判断を国内および全世界の人びとに訴え、力をあわせて事態を打開する方向を切りひらきたいと思う。

まず、カンボジアのポル・ポト政権は、独自の社会主義の建設を試みようとしたのであろう。しかし、社会主義の根本の一つをなすはずの民衆の自己権力、人民主権の理念が見失われ、それが抑圧の機構となつて人間の基本的権利を犯す結果を生んだ。しかし、一方ベトナムがカンボジアに兵器を送り、軍隊を派遣し、自己に有利な政権を樹立したりすることは許されない。それは人間の基本的権利の一つである自決権、この場合ならクメール民族の自決の権利をふみにじるもので

ある。ことはあくまでもカンボジアの民衆の問題であつて他国の武力干渉は正当化されない。

また、中国が、ベトナムへの「懲罰」を名目として、ベトナム領土に軍隊を侵入させ、軍事攻撃を加えたことは、同じく許されることではない。たとえ中国の声明どおり、その軍隊の早期撤退が実現したとしても、この侵入の事実と道義的責任がなくなるわけではない。

こうした一連の過程で、最も被害を受けているのは、今主要な戦場となつているカンボジアとベトナムの一般民衆である。いや、民衆のみではなく、他国領土内に送りこまれ、戦闘に従事させられるベトナム、あるいは中国の兵士も同じである。そこでは、かつて兵士としてベトナム侵略に駆りたてられたアメリカ合州国の若者たちと同じく、生命をおびやかされるだけでなく、眼に見えぬ荒廃に内部をむしばまれてゆくことになるであらう。

ベトナムとカンボジア、中国とベトナム、そして、さらにその背景にあるソビエトと中国との対立、衝突——ここに見られるのは、社会主義を自認する諸国が、その根本の原理であるはずの普遍的な人間の解放、窮極的には国家の廃絶を前提としての人類の解放という大目標からはずれて、政策を国家エゴイズムに収斂させてしまつていく姿である。そして現実には衝突が繰返されるなかで、第三次世界大戦の危機すら醸成されかかっていることを、多くの人びとは感じとつた。こういう状態を私たちとしては黙過できない。私たちの立場はさまざまである。国籍、民族、伝統、宗教、主義主張にはそれぞれ違いがある。しかし、その相違をこえて、私たちは、ひとりひとりの人間があらゆる抑圧、差別、搾取を受けずに生きることができることを基本とし、国家をふくめて、いかなる制度もその目的実現のための手段にすぎないと考えてきた。とくに世界中の最も抑圧されている民衆が自らを解放

し、自らの意志によって人間らしく生きること、すなわち、まず飢えから自由になり、他人の奴隷になることも他人を奴隷とすることもなく、自由、平等、自決の原理に立って生きること、これをものごとの基本としてきた。

この立場から、私たちは、中国革命に共感を覚え、アメリカの侵略と戦うベトナム民衆の解放闘争に連帯し、あるいはまた自国を含め、さまざまな国での反抑圧、反差別、解放の闘いに参加し、あるいはそれを支持する行動をつづけてきた。

今、私たちがひとしく憂えるのは、世界全体に広がる政治的退廃である。

社会主義を自認する諸国が、世界でも抑圧された民衆の生きる第三世界の解放にとって、大きな役割を果たしてきたことは事実である。私たちはそれを高く評価するが、それが今、これら諸国間の衝突抗争によって、大きな原理的、現実的危機にさらされていることも、否定しがたい事実である。

それのみではない。かつてベトナムを武力で侵略し、国土を荒廃に帰させた国家や、それと協力した国ぐにが、その責任を棚上げにして、国際舞台の上で人権

の代弁者のごとく振舞い、また、かつてこの侵略を支持し、ベトナム反戦運動に敵対した勢力が、ベトナム難民問題や諸国間の衝突をとらえて、これら反戦運動の大義を中傷し、さらには、アメリカのベトナム侵略行為までも復権させようとしている有様は眼にあまるものがある。

かくして、自由主義を自認する国々には、第三世界にのしかかるその旧世界秩序の中に安住することで、自らを退廃させる。

要するに、退廃は、社会主義、自由主義を自認する国々に、第三世界にわたって相互に連鎖反応をひき起こし、民衆一人ひとりの解放、自由、平等、人権という基本が忘れられ、蹂躪されてゆく。

社会主義を自認する国々によ、その国家、人びとよ。無用な対立、抗争に一刻も早く終止符を打て。国家エゴイズムを超えた人類解放という普遍の大義に立て。それはあなたがたにとってだけ必要なことではない。第三世界の最も抑圧された民衆にとって必要なことである。

第三世界の国家、人びとよ。おろかしめ、対立、抗争にまきこまれることなく、自らの足で立って解放をかちとれ。私たちはそれを心から期待する。それはあな

たがたにとってだけ必要なことではない。社会主義、自由主義を自認する国々には人間にとっても必要なことである。私たちは、私たちの立場から、できるかぎりの努力をしたいと思う。

社会主義を信奉する諸国、第三世界の国家、人びとに対して、私たちがそうしたことを訴えるならば、私たちがそうしたことを訴えるならば、私たちが自身の国家に対して、自由と平等の原理に立って、人権を基本にした政治をかたちづくるのが急務だといっそう強く要求しなければならぬ。また人びとに対しては、そのためにともに努力しようと呼ぶべきではない。金大中氏の「原状回復」ひとつなしない状況のなかで、他を論難することはできない。ベトナムにかかわって言えば、日本が「国際難民条約」を批准せず、ベトナム難民をひきとることなしに、自由の価値を説くことはできない。

全世界の人びとよ、国境をこえて、ひとりひとりの人民のレベルで新しい連帯をかたちづくるための行動をおこすことが、今ほど必要な時はない。

一九七九年三月一六日

〔署名者〕 いいだも 飯沼二郎 石 佐多稲子 斉藤正彦 斉藤浩司 清水知
 崎昭哲 井上澄夫 和泉あき 色川大吉 久 庄司洗 芝生瑞和 芝充世 袖井林
 海老坂武 大井正 岡田理 小田実 小 二郎 高橋武智 田守順子 円谷真護
 田切秀雄 小沢遼子 小野山卓爾 金井 戸井昌造 中嶋正昭 南坊義道 中山千
 礼子 金子勝昭 川田泰代 笠原乾吉 夏 西川潤 西田勝 花崎皋平 原田奈
 菊地昌典 銀林浩 久野収 国分一太郎 翁雄 針生一郎 樋口篤三 日高六郎
 東一邦 福富節男 藤本義一 古屋能子
 前田俊彦 松浦総三 真継伸彦 室謙二
 ものべながおき 森毅 矢崎泰久 山
 川曉夫 山田宗陸 吉岡忍 吉川勇一
 吉田泰三 吉野源三郎 渡辺勉(以上六
 一名)

まず口火切ります——中越・四つの独断

栗原幸夫〔週刊ポストカード〕1979/4/1

ベトナム・カンボジア・中国の戦争をめぐっていま必要なのは何者にも気兼ねしない自由な討論だと思ふ。そこでまず口火を切る。小田実・吉川勇一両兄に、愛をこめて。

カンボジアについては依然として情報は少ない。しかしあそこで起こったこと、現実に起っていることを、理念からではなく事実即して研究することが出発点

だと思われる。あれを「独自の社会主義の実験」として言えるのか。人民権力のないコミュニケーションは虐殺の体制だ(人民寺院を見よ)。数百万の人間が殺されたべトナム軍の行動は正しい。となれば中国のベトナム侵入は無条件で非難される。ごちゃごちゃやみん絡ませて、社会主義はどれも駄目、という立場を、私はとらない。

第二、大国にたいし正義はつねに小国にあるという主張はいただけでない。日米戦争で正義は日本にあったか。大東亜戦争肯定論になりますよ。

第三、国家でなく人民を、というのは良いが、国家を国家たらしめているのも人民だ。人民は常に被害者とは限らない。

第四、普遍的・超歴史的な「人間の立場」というようなものは存在しない。以上、まず問題の羅列から。さて、討論をはじめませんか？

あれは社会主義か——素直な人への挑発

栗原幸夫〔週刊ポストカード〕1979/4/29

皆さん何か錯覚してるんじゃないでしようか——社会主義国同士が戦争をした。

もちろん私はモノゴトを善玉・悪玉と割り切って涼しい顔をしていられる人たちより、こんなに素直に心情を吐露できる人の方が好きだ。私もそういう人たちの仲間だと思っている。しかし、キョー

サン党が政権をとりさえすれば、もう社会主義になったと考えるのは、これは錯覚というものではないでしょうか。革命とは権力の問題であるとレーニンさんは言いましたが、社会主義は社会経済構造の問題です。そして戦争の原因は権力者の恣意ではなく、経済構造にあるというのが、レーニンさんの

理論でした。中国やベトナムは、はたして社会経済的に社会主義になってしまったと言えるでしょうか。もちろん彼らは帝国主義国ではありません。しかしもししたら、絶対主義あるいはフランス革命後のナポレオン時代と、同じ歴史的 position に彼らはいまいるのかも知れない。それは御承知

拝啓栗原幸夫様——文革の大切さは如何

吉川勇一（週刊ポストカード 1979/5/13）

4月1日号の本欄で「口火」を拝見したのは4月の末のことです。私はA A作家会議の会員でも「週刊ポストカード」の読者でもなかったし、またこの号の寄贈も受けていませんでした。本人が読んでいないことが明瞭（私はA Aの会員名簿に載っていない）なところで、論争の口火を切られるのはいささか困ります。それに、小田、吉川がなんで論争の対象とされたのか、多くの読者には不明でし

よう。関心のある方は、雑誌「世界」5月号の日高六郎氏の文章をお読み下されば、その背景がご理解いただけると思います。以上は中味に入る前にお断りすべき前提です。

さて、以下箇条書き。

第一。事実在即すこと大賛成。したがってカンボジアで「数百万人が虐殺された」という事実を、私は確認できない。かりにそうだとしても、ベトナム軍がク

のように戦争とナシヨナリズムの時代でした。

私も戦争に反対です。戦争を無くしたいと熱望する者です。

しかし絶対平和主義というのは無力なイデオロギーだと思えます——これだけ挑発したのだから、誰か反論を。

メーブル民族の内政に介入することは正当化されえまい。それはカンボジアの問題である筈。

第二。国家を国家たらしめているものも人民だ、とされる。それなら、「人民権力」といえども人民が変らなければ虐殺の体制となるのでは？

第三。社会主義が社会経済構造の問題とされますが、その限りでは、虐殺は防げないのでは。社会主義的人間変革、文化大革命の要素を加えるべきと思えます。

『天皇論』を読む▼水島たかし

高島通敏編

『討論・戦後日本の政治思想』

(三三書房・一九七七年)

本書は、高島通敏が参加した一九七五年前後の座談会をまとめたものである。したがって、『討論・戦後日本の政治思想』と銘打たれ、高島のほかに表紙に日高六郎から栗原彬に至る一二人の論者の名が並べられているとはいえず、それらの論者が

「戦後日本の政治思想」という一つのテーマに向かって総合的に討論を行なった記録というわけではない。ただし高島によれば、週刊「エコノミスト」での討論をきっかけとして、そこで「言及しそこなったことへの不満」から、「他の雑誌で同じように戦後思想に関していくつかの討論の機会をもった後、最初の機会に論

じ切れなかった側面を補いつつ、戦後の政治思想の全体像について討論形式で一書をまとめようという構想が生まれた」のであり、いくつかの討論はそれを念頭につくられているという（あとがき）。

そのきっかけとなった「エコノミスト」での討論というのが、第一章「政治思想の戦後」（日高六郎・橋川文三「高島も参加。以下同様」）である。これをいわば総論として、以下、右翼・ナシヨナリズム側の論理を議論した前半と、「左派」に分類されるであろう側の「思想」を論じた後半とに分かれている。

前半の第二章は「右翼の思想」

（橋川文三・いいたもも・丸山邦男）および付論として橋川文三との「ナシヨナリズムの逆説」。第三章は「戦後日本の天皇制論」（鶴見俊輔・色川大吉）と高島の短い付論が二本。後半に入ると第四章「革新の思想」（山田宗陸・花崎皋平）、第五章「市民運動の思想」（久野収・福富節男）、第六章「住民運動の思想」（栗原彬）となっている。後半の議論も興味深くはあるが、本欄の関心からすれば、前半部、特に天皇制の問題に注目してみていきたい。

そもそも、この七五年前後の時期に、なぜナシヨナリズム論であり天皇制論であるのだろうか。同時代感覚を持たない私には最初よくわからなかったのだが、本書を読む限り、それは次のような背景に由来するようであった。

一つは三島由紀夫の割腹自殺（七〇年）の評価をめぐる問題である。本書の読後感としては、やはり三島

事件のそれなりの影響力を感じないわけにはいかない。しかし、三島事件が単独で衝撃だったのではないだろう。六〇年代末から顕著になった、既成の革新勢力⇨近代主義からこぼれ落ちる情念やラディカリズムあるいはテロルとどう向き合うのかという問題設定の中で、「右翼」あるいは「日本のナシヨナリズム」の再検討が求められた。

二つ目に、一点目と関連するが、近代主義すなわち左右を貫く「生産力」主義の帰結として公害問題・生活問題が生じ、それに対する住民運動がこの頃活発化していた。この住民運動の発想の中から、反近代や共同体論や「土着」といった議論が生じた。これを媒介として、ムラ社会や郷土主義や農本主義の再評価といったそれまで「右翼」的とされてきたテーマにつながっていったように思われる。

三つ目に、天皇（ヒロヒト）夫妻

の訪米（七五年）といった、戦後象徴天皇制の新たな展開がある。本書末尾につけられた和田ゆきえ編「年表・戦後日本の政治思想」の七五年の項を眺めると、同年の七月には「皇太子夫妻、沖縄ひめゆりの塔前で火炎ビンを投げられる」とも記されている。また七四年の項では「ヒロヒト在位五十年にむかって天皇制論議さかん」とある。「動く象徴」が「政治」的に問題になりつつある時期だったと言えよう。

特に三つ目の天皇訪米という題材は、第三章の討論の直接的な「きっかけ」をなしている。第二章「右翼の思想」が（付論も含めて）文字通り「思想」をめぐる議論でしかなく、面白くはあるが、右翼の可能性と不可能性を議論しようというのとはどこから他人事めいている。それに対してこの第三章「戦後日本の天皇制論」は、「思想」にとどまらない象徴天皇制の機能に触れていて興味深

い。

この章では、まず色川大吉が天皇訪米のニュースを見て、「皇后のスマイルとか、天皇のデイズニールン」などでの表情みたいなものを大写しにすることによって、戦前とは違うより高い政治的な効果を期待するところが丸出しになっている」（一六七頁）と指摘している。それを受けて高島は、マスコミの報道姿勢を戦前と比べて「コマージュベースで動いている」、つまり「オリンピック報道と同じレベル」であると述べる。それは「マスコミの内部機構をひじょうにうまく利用したやり方」であると同時に、「自主規制の度合い」が週刊誌からテレビまで「ピラミッド型の自主規制が暗黙のうちにできあがっている」のであり、「この規制の仕方というのは、戦前のように天皇報道そのものについてきまりきったパターンを作りあげて流すというのとはかなり違って、

一種の柔軟反応戦略」で「日本は完全に言論の自由がある」という印象を持たせるものだと言っている（一六八―一九頁）。こうした議論はメディア天皇制のあり様を的確に押さえていると言える。

また天皇（特にここではヒロヒト）に向けて、戦争責任を含む「人間の責任」を追及することに対して、高島はそれを「基本的に戦中派を貫いている心情」だとして距離を置き、むしろ「天皇個人」ではなく「天皇制というシステム」を意識的に問題化しようとしている。これは、天皇個人を追及することが酷であるとか大衆的支持を失うとかいう理由からではない。むしろ天皇の政治的パフォーマンスを批判するためにそう言うのである。

「……自分たちが国家指導者としてのだれかに情念的な思いを託すという、その心情のもち方そのものに

一種の落とし穴があるんじゃないかと思うんです。ですから日本の侵略戦争の責任という問題も、民衆の幻滅にこたえて、天皇に退位してもらう。そして新しい民主的、平和的皇太子を次の世代に立てるということで、ずっと情念は解消してしまうということになるでしょう。そういう種類のものよりも、天皇は本来、無責任なものであるということですね。私は永遠に無責任の象徴でとどまっていたほしいと逆に思いますね。そしてそのことに対して民衆が醒めていくということのほうがもっと大切なのではないか。その時には問題の立て方が根本的に違ってくるという感じがするわけです。」（一八三頁）

「知識人たちは、天皇にアメリカに行つて戦争についてディプロマ（遺憾であった）などといってほしくない、行くんだつたら最初に中国へ行つていえという。それは正論に

ちがいないのですが、それなら天皇が中国へ行つたら「ああよかった」とみんなが胸をなでおろして一件落着なのだろうかという疑問が残る。より本質的にはそんな種類の問題じゃないんじゃないか。天皇にそんなことをいう資格もなければ、そういう期待をかけること自体おかしいんじゃないか。」（一八五頁）

「個人なら人間として相手が忘れましたと手を差しのべても、到底ゆけませんというところを平然と出かけて、遺憾でした式のことをいうのが、天皇というものなのだ認識してかかるほうがよい。天皇に国民を代表してどこかへゆかせて、何かをいわせるといふ争いに熱中したくないというのが私の感じなのです。」（一八八頁）

ここには国家の政治（特に外交）装置としての象徴天皇制が浮き彫り

にされている。これら高畠の一連の発言は鋭いものだと思ふ。とはいへ、「皇室外交」に公然と反対する現在の反天皇制運動の立場から見ると、高畠の主張にはどこか及び腰な面も残る。「中国へ先になぜ行かんか」というのは久野収の主張だったようだが（一八七頁の色川発言）、この時期は天皇制認識が転換していきいけば過渡期であったのだろう。

第三章の付論として収められた「天皇制論の現在」では、まさにこの天皇制論の「世代の交代」が指摘されている。戦中派世代の「現天皇個人の（人間性）」を問う議論として、児玉誉士夫の「天皇退位論」と井上清の「戦争責任論」があげられる。その一方で、前号本欄で論じた小田実の「私と天皇」や菅孝行の「天皇論ノート」が戦後世代として言及される（一九七〜八頁）。小田や菅は、現在にも連続し機能し続けている天皇制の機能を問題にしてい

るものとして評価されている。高畠自身の主張も、小田や菅に連なる新しい問題提起だったということだろう。

しかしそうではあっても、高畠の言う「天皇制というシステム」の内実は曖昧であるという印象も否めない。高畠は、六〇年代以降の象徴天皇制は、企業社会の頂点に立つ（大衆から再び遠ざけられた）「象徴」の役割を果たしていると考えた（一七八頁）。これは小田の「私と天皇」における認識と重なる（ちなみに高畠は天皇制の「顕教／密教」論の批判も行なっており、これも小田と重なる）。しかしこうした「システム」認識は、第三章の討論が結局「われらの内なる天皇制」克服という方向に流れてしまっているように、象徴天皇制支配の印象批評にしかなくなってはいないように思われる。メディアの「自主規制」にしても、それを作り出している暴力とスポンサーの圧力

については明示的に論じられていない。「皇室外交」批判も、憲法との関係では検討されていない。要するに高畠の天皇制論も、「思想」の分析に傾き、戦後天皇制の制度・実態的な分析が弱いように思える。

本書が示しているように、七〇年代半ばは、象徴天皇制批判の幕が開き始めた時代だったのだろう。もともと、三〇年以上経った今でも、天皇制批判の論理は解明され尽くされてなどいないのだが。

「水島たかし（みずしま・たかし）反天皇制運動連絡会」